

人口減少・若者女性支援調査特別委員会会議記録

人口減少・若者女性支援調査特別委員会委員長 小西 和子

1 日時

令和6年9月4日（水曜日）

午前10時00分開会、午前11時43分散会

2 場所

第1委員会室

3 出席委員

小西和子委員長、はぎの幸弘副委員長、関根敏伸委員、岩渕誠委員、佐藤ケイ子委員、千葉伝委員、城内愛彦委員、鈴木あきこ委員、千葉盛委員、佐々木努委員、高田一郎委員

4 欠席委員

木村幸弘委員

5 事務局職員

加藤担当書記、吉田担当書記

6 説明のため出席した者

弁護士法人 幹 盛岡さくら法律事務所 弁護士 渡部 容子 氏

7 一般傍聴者

3名

8 会議に付した事件

(1) 調査

岩手県におけるDV・セクハラ被害の現状 ～法律相談の現場から～

(2) その他

次回の委員会運営等について

委員会県外調査について

9 議事の内容

○小西和子委員長 ただいまから人口減少・若者女性支援調査特別委員会を開会いたします。

木村幸弘議員は、所用のため欠席とのことでありますので、御了承願います。

これより本日の会議を開きます。本日は、お手元に配付しております日程のとおり、岩手県におけるDV・セクハラ被害の現状について調査を行いたいと思います。

本日は、参考人として、弁護士法人 幹 盛岡さくら法律事務所、弁護士、渡部容子様をお招きいたしておりますので、御紹介いたします。では、一言お願いします。

○渡部容子参考人 渡部容子です。どうぞよろしくお願いいたします。

○小西和子委員長 渡部様の御略歴につきましては、お手元に配付している資料のとおりでございます。

本日は、岩手県におけるDV・セクハラ被害の現状法律相談の現場からと題しましてお話しいただくこととしております。

渡部様におかれましては、御多忙のところ、このたびの御講演をお引き受けいただき、改めて感謝申し上げます。

これからお話をいただくことといたしますが、後ほど渡部様を交えての質疑、意見交換の時間を設けておりますので、御了承願いたいと思います。

それでは、渡部様、よろしくお願いいたします。

○渡部容子参考人 皆さん、こんにちは。きょうはお招きいただき、本当にありがとうございます。こうして私のような者の話を聞いていただけるということで、とても感謝しております。着座でお話しさせていただきます。

簡単に自己紹介させていただきますと、私は横浜市で生まれ育ち、東京都の大学、大学院を出ましたが、地方で生きていきたいという思いがあって、当時東京修習司法研修所に司法修習生が300人ぐらいいた中で、唯一、私だけが地方での就職を選び、最初に仙台市に行きました。そこですぐ東日本大震災津波に遭遇して、被災者支援に大分奔走した若手時代でした。もちろん被災者が大変だということだけではなく、そういうときは女性や子供たちに確実に困難が降りかかり、避難所でも相続やDVなど、さまざまな問題が深刻化しました。半年ぐらいは奇妙なぐらい静まり返っていたのですが、半年を過ぎた頃から、徐々に御相談が来て、深刻なDV被害を随分扱ってきました。

9年前に岩手県に引っ越してきました。仙台市もよかったのですが、子育てを大自然の中でしたいという思いがあり、私の母が盛岡市出身で、祖父母は亡くなってしまったのですが、唯一、10人いる孫のうちの私1人が盛岡市で暮らすことを選び、小学生と保育園児3人の子供を育てながら、大変な日々を過ごしております。

自分自身が横浜市という割と都会の中で育った経験から、こちらに来て自分の子育てや、事件を通していろいろ知り得ることに、すごくギャップを感じています。私は、横浜市にいたときは、とにかく生きづらさを感じる子供で、実は学校にほとんど行っていません。中学校は、授業には出るが、聞かずに本を読んでいて、高校はほぼ不登校で、どこにも居場所がなく、勉強が嫌いな子供だったため、受験競争も嫌で、一人一人が群衆の中の一人みたいに扱われているという気がしていました。しかも、横浜市は、全国の市町村の中で米軍基地が日本一多いまちで、米兵がすごくたくさんいたのですが、女子高生が被害に遭うことがありました。そういったことから大人への不信感がすごく強くて、人が住むところではないと思っていました。

司法修習生のときも、毎日、満員電車で霞が関に通うのが、本当に窮屈でした。困っている人がいても、みんな見て見ぬふりをし、自分も手を差し伸べられない、人が人でなくなっていくような状況がすごく嫌で、それで地方であれば人間らしい暮らしができるので

はないかという直感があって越してきました。

実際こちらに来てみると、本当に時間の流れもゆったりしていて、人と人との関係がよい感じで横でつながっている。子供を産み育てることにすごく歓迎してもらえるし、温かい目で見守ってくれるという地域社会があり、私自身は自然の中で毎日通勤ができて本当によかったと思っています。

きょうの委員会のテーマでもあるので、冒頭に話をさせていただきたいのですが、私は横浜市や東京都に住んでいる友人に、何でそんな思いをしてそこに住んでいるのかという話をしています。向こうでは、少子化で子供は持てても1人か2人です。私の同業の友達ですら、経済的に厳しいと言って、2人までと言っています。早い子だと小学校1年生から塾に行かせるのが当たり前で、公立高校、公立中学に入るなんて貧困層だけだと言います。当時不登校で、私と一緒にばか遊びをして、偏差値35だった友達が、子供たちを1年生から塾に行かせて、受験競争に駆り立てています。「今はそういう時代だから。容子、時代が変わったんだよ」と言われます。私が小学生のときは、そこまで受験競争はなかったのですが、「今はね、生き残るために必死なんだよ。習い事もいっぱいやる時代なんだ。だから、すごくお金がかかるから子供なんて育てられない」と言います。家賃もすごく高い。だから、夫はものすごく稼がなければいけないという感じで、みんなワンオペ育児をやっています。

「岩手県に越してきたらいいのに。最高だよ」という話をすると、みんなすごく興味を持ちます。時々遊びに来てくれる友達がいて、私の夫の実家がある花巻市東和町のさらに人里離れたぼつんと一軒家みたいなところにある、空き家に時々泊まりに行きます。本当に何も無い、くみ取り式トイレがあるようなところなのですが、そこで何泊かその友達といると、子供たちは本当に生き生きとした姿を取り戻すし、親たちもゆっくりとした時間を過ごせて、「本当にこういう生活ってあるんだね」みたいな感じになるのですが、「とはいったって仕事ないし」という話になります。仕事がないか知らないでしょう。調べたことないでしょうと思うのですが、多分妄想というか、イメージの世界なのです。「仕事があるかどうか本気で探してる？しかも、東京都と同じぐらいの給与は無理だけど、はっきり言ってそんなに大金かからないよ」と言いたいのです。確かに大手のスーパーに行けば同じかもしれないけれど、産直とか、地域の八百屋や魚屋で買えば、圧倒的に安い値段で買えるし、ほとんど交通費のかからない生活ができる。東京都にいたときは、オレンジカードやスイカを持って、ばんばん交通費がかかっていました。「そういうのも全然こっちだとかからないんだよ。徒歩圏内とかで、大体の事が足りるような設計になっているんだよ。子供たちだって、そんなに受験競争に駆り立てなくて済むし、お母さんも子供も伸び伸びと暮らせるんだよ」という話をすると、何人かは迷うけれど、「とはいえ、夫がね」「そんな今さら転勤なんか、仕事の当てもないし」となります。「容子は自由業だからいいわよね」という話で終わります。

弁護士の後輩は、深夜まで働いて、タクシーで帰る生活をずっと続けています。「それだ

から体を壊すんだよ」という話をしていますが、それが当たり前だと思い込んでいて、地方で暮らすという選択肢を思いつかない。特に私のように、縁もゆかりもないところに引っ越すなんていうことは考えられないと思います。

コロナ禍にInstagramを始めたのですが、とにかく岩手県の魅力が全然伝わっていない。こんなに住みやすいところがあるのに、しかも盛岡市というのはほかの田舎と違って、歴史と文化の力なのか、圧倒的にただの田舎ではないのです。遠野市や二戸市とか、それぞれのすばらしい文化があって、軽米町で日本一雑穀が取れるということだって、本来世界中に売り出していいようなことがたくさんあるのに、全く発信されていないがために、魅力が若い人たちに伝わっていないと思っています。それだけ私は岩手県にぞっこんほれ込んで、これからもここで生きていきたいと思っていますが、横浜市と違って、悪い意味で非常に保守的です。

朝の連続テレビ小説の「虎に翼」の戦前の描写を見て、一緒だと思った人がたくさんいると思います。せっかく寅ちゃんみたいな人たちが、戦後、憲法というものに感動して、民法改正のときにすごく頑張って、憲法 13 条、14 条を手に入れたのに、私たち国民はそれを使わないとただの絵に描いた餅になってしまいます。特に岩手県民は、言葉を選ばずに言うと、上の人が何とかしてくれる、お上には従うものだ、盾突くな、出るくいは打たれる、同調圧力みたいなものが強いので、とにかく目立つな我慢しろという教育が小さいころから徹底して行われて、そういう権利を主張するということをしないのです。だから、憲法施行から 70 年、80 年たっていても、私たちの生活に、憲法理念とか、当たり前の基本的人権というものが全然浸透していないのです。相変わらず子供は戦前のような全体主義的、集団主義的な教育を受けさせられ、大人たちは人権が侵害されたような形のことが当たり前起きています。

私は仙台市にいたときに思ったのですが、特に沿岸の石巻市や気仙沼市でのDV、パワハラ、セクハラの被害が大きかったです。相変わらず家制度の家父長制、嫁だから子供を置いて出ていけみたいなことは当たり前です。私は死語だと思っていたのですが、家督相続ということを相変わらず言うてくるのです。横浜市でそんなこと言う人はいません。要するに、長男が全部家のものを相続するのだと勘違いされている方がいる。だから、私が家を継いだんだから、何で妹たちにそんなことを主張されなければいけないのかだとか、親もそう思い込んでいて、すごく深刻な家族間のトラブルにつながっているケースもあります。古い家制度がいまだに残っていて、それが我々を幸せにすればまだしも、一人一人の自由な選択を阻害している。そこにまさに生きづらさを感じた若者たちは、県外に出ていきます。

私の夫も花巻市出身ですが、昔から本当に嫌だったと言っています。もっとさかのぼると、私の母も仙北小学校、仙北中学校、盛岡第一高等学校を出たのですが、当時から嫌だったと言っていました。特に女子はすごく少なかったし、ちょっと勉強ができたので目立ってすごくたたかれた。そういう空気が本当に嫌だったと言っていました。18 歳を境に大

学に行って横浜市に行き、戻らないと決めていて、私に対して物珍しそうに、「あなた、よくあんな保守的なところで生きているわね」と言ってきます。

だから、当時も、大昔も今も、新しいことを生み出していこうとか、自分でちょっと何か頑張ってみようという、志や能力のある人たちは、どんどん県外に行くと思います。でも、その人たちが本意かという、「岩手県は人もいいし、自然もいいし、食べ物もいいところなんだけどね。でもね」と、こうなります。だから、私も夫が岩手県に残るのを説得するのにすごく大変で、「はっきり言って横浜市の教育のほうが子供たちにとっていいと思うよ」と言われました。自分が花巻市の高校を出て、大学は東北大学で県外に出たのですが、そこを説得するのに、「違うから、ここで育てることに意味があるから」という夫婦の話し合いになるぐらい、いまだに問題意識を持っている人は多いのではないかと思います。

私も学校にいくと、どうして学校現場だけ時がとまってしまっているのか本当に衝撃を受けます。前と同じことをすることがいいと思っているのか。例えば、なぜ運動会で駆けっこをするのかということについて、その必要性和相当性について議論していません。海外のマラソン選手が来たときに、いまだに日本は順位をつけているのかと驚いたという校長先生の話がありました。私の友達が住んでいる、埼玉県や横浜市の学校では、もう宿題を課さないのが当たり前だそうです。小学校の親友が教員をやっているのですが、「岩手県ではまだそんなに宿題を出しているの」と言われます。それを私が学校の先生に言うと、「宿題を出してほしいと親が言うんですよ」と言うのですが、小学1年生のときから大量に宿題を出すことがよしとされていることについて多分議論がされていないのです。きちんと議論をして、これはこういうことで必要だということで、やり方も含めて整えていくということであればわかるのですが、先生方の過剰労働を見ても、何もそこに議論がなされていない。人間というのは自分の過去の経験を美化します。関係者の皆さんは心情を害されるかもしれませんが、盛岡第一高等学校の出身者は、合唱や応援団で、暴力的な練習をしたり、伝統的な文化を必死で守ろうとします。それが悪いと言っているのではなくて、それが本当に教育的にいいのかどうか、子供たちのためになるのか、過去はよかったかもしれないけれど、今どうなのかということについて、教育というのはその都度検証する必要があると思います。そういうことが先生たちは忙し過ぎてできないのだと思います。そういう人たちがそのまま大人になって、大人になってから、まさに集団の中でどう生き抜くかという、自分の権利主張をせずに、長いものに巻かれて生きる生き方みたいなのを身につけた人が多い。それがこのDV、セクハラ被害の、ここまで泣き寝入りを余儀なくされている現状につながっていると思っています。

最初に言いたいことを申し上げましたので、レジュメに沿って話をしたいと思います。1 ページ、1、これは完全に私の独断と偏見で岩手県に9年間住んでの印象です。これは、よくも悪くも非常に我慢強いと思います。仙台市にいたときと比べものにならないぐらい、相談者の方も、依頼者の方も、我慢強いです。先日いらした相談者の方は、20 年位前の性

被害について、最近ようやく話したといいます。なぜ言えなかったかという、田舎の方で、そんなこと言ったら生きていけないと思ったし、祖父母が生きているうちは悲しませるから言ってはいけない、亡くなったら言おうと思っていたそうです。その20年間、彼女はどのように生きてきたかという、ずっと苦しめられていました。男性不信もすごいし、せっかく縁あって結婚した夫との性行為も気持ち悪くて仕方がない。いまだに睡眠剤を飲み精神科に通院し続けている。たった1度の性被害で20年間苦しんでいるその方は、20年たって初めて弁護士のところに相談に行ったのです。それまで誰にも言っていなかったという、そういう方もいるぐらい本当に我慢強い、恥の文化というのが根強く、子供にまで浸透していると思います。

私がよく言う話で、宮沢賢治という人がある種憲法の上位規範みたいな形で岩手県では置いていると思います。私も賢治が大好きで、全くそこを否定するつもりもないし、尊敬していますし、賢治の思想があるからこそ、岩手県というのはこれだけ豊かに暮らせていると思っているのですが、雨ニモマケズというあの詩を、賢治が手帳に自分向けに書いていた詩を子供たちに読み聞かせて、道徳教育をしているわけです。詩は私も共感しますし、自分の中の自分との戦い、自分を律するものとして抱く分には非常にいいと思います。ただ、これを他人に強制したら人権侵害です。だから、そこを特に子供たちに強制しないでほしいと思います。そんなに雨にも風にも負けないで生きなくていいのです。つらかったら泣いてもいいし、誰かにSOSを求めてもいいし、傘を差したって、どこかに逃げたっていいのです。あと、人助けができるときもあれば、できないときもあるわけで、人間というのはいろいろな場面を生きています。そういう自分の弱さを表に出せないという、ああいう人間でありなさい、我慢強くありなさいということが教育現場や大人の社会で徹底されてしまうと、本当に声を上げづらい、生きづらい社会になっていると思います。

そして、根強いのは性別役割分業意識です。男は、文句も言わずに、涙も流さずに、仕事で徹底して働け、24時間働けますかみたいなのが相変わらず多い。労働審議会の委員もやっていますが、岩手県の労働時間は他県より圧倒的に多いのです。その理由を労働審議会でも聞いても、「県土が広いからですかね」というのと、「中小零細企業が多いからですね」と使用者側委員がおっしゃいます。長時間労働が家庭を崩壊させる原因にもなるし、岩手県は脳疾患や心疾患とかで亡くなる方もすごく多いです。そういういろいろな問題に結びついていると思うのですが、全くそこにもメスが入らない。要するに男なのだから文句言わず、四の五の言わず働け、女はきちんと家を守れ、家のことをするのが当たり前だ、気遣いをしなさい、きちんと周りの状況を察して生きていきなさいというような、ジェンダー意識がいまだに根強い。それを小さい子供たちにも、保育園、幼稚園のときから教えていると思います。これははっきり言って、言葉ではなくて、無意識や、雰囲気の問題だったりするのです。さすがに皆さん口では言わなくなっていますが、そういう雰囲気が職場にあったら帰れないですよ。子供たちだって、大人たちのそういう雰囲気を察して行動する、自分の規範にしていくので、この雰囲気を取り除いていかなければいけないと思っ

ています。

あと、これも口にはしないですが、残念ながら男尊女卑は、相変わらずあります。経営者の集まりでも、相変わらず女性を排除するということもありますし、女は加わらせるなというような組織も実際に結構あります。

あと、私は人間を苦しめるのは同調圧力だと思います。人間というのはそもそも多様な生き物です。LGBTなんて取り上げるまでもなく、自分自身がまず多様ではないですか。いろいろな得意不得意、その日そのときによって顔が変わりますよね。それは、人間というのはみんなそうなのです。強いときもあれば、弱いときもある。にもかかわらず、同調圧力がある。コロナ禍での子供の圧倒的マスク率の高さで思いました。それは、岩手県が何かいいこととして語られましたけれど、皆さんが自主的になさっているのであればとにかく、私は同調圧力の一つの帰結ではないかとすら思いました。それも、そんなことを口にすることもはばかれるような状況がありましたよね。だから、そういうのも本来であれば議論すべき事柄なのに、なぜマスクをつけなければいけないとか、つけるべきなのかということについて、議論もないまま強制されたと思います。

それから、嫁、主人、外孫、内孫という憲法違反の言葉が相変わらず日常的に使われています。これは、全てこの国の憲法で否定されるべきことだと私は思います。女に家、女に古い、女に良い、全てよく使われる言葉ですが、これも家制度から出てきた言葉です。主人という言葉は、それに代わる敬語がないから皆さん当たり前のように使っていますが、主人であれば妻は何なのでしょうということに目を向けるべきだと思います。基本的に主従の関係で、従たる人になります。それが私たちの内面化に影響を及ぼしてきます。結婚するときに、95%以上の家庭で、妻は夫の氏を名のります。それもほぼ夫婦の間で話し合いは行われることがないと思います。そこが決定的に問題です。せめて2人の間に対等、平等な話し合いがなされた上で夫の氏を選択したということであればとにかく、ほぼ全ての夫婦が当たり前のように夫の氏を選択しています。これは、夫の家に妻が吸収合併されるということです。私がよく言うのは、三井銀行と住友銀行が合併するときに、三井銀行となったら住友銀行の人たちは「えっ」と思います。社会的にも三井銀行のほうが上だったのだと思います。なので、何とか三井住友銀行みたいにするわけです。それでも三井銀行のほうが上かなと思います。相変わらず男性が上の名簿とかを作成されているのも、私たちは当たり前になってしまっていますが、この三井住友銀行の例を挙げると、結構簡単に何かおかしいなと気づいていただけるのではないかと思います。

県議会でも請願書を採択していただきましたが、選択的夫婦別姓の話、こんな当たり前のことすらいまだに通らないということが私にとっては不思議でならないのです。そして、そういうことが多くの結婚を阻害し、少子化にもつながっているという現実的な問題があります。氏を変えたくないという女性たちは、自分たちのキャリアが失われることになるし、やはり氏というのは人格権の一つですから、その人格権を尊重するという憲法上最も大事な考え方を国家が強制的に奪うという、この人権侵害の問題性に気づいていないと

ということが、主人という言葉につながっているし、戸籍筆頭者という制度にもつながっています。当たり前のように世帯主ということで夫が語られることは、当然ながら男性にとつての生きづらさにもつながるわけです。男の人は弱音も吐かず、一人住宅ローンや車のローンを抱え、妻子の生活を支え、自分がつらくても仕事は休めず、栄養ドリンクを飲んで、休まずに働くものだという、男性も生きづらい社会の中を生かされていて、それを私たちの息子につないでしまっている。それをもし教育現場の方々が真剣に考えるのならば、今の教育というのは絶対に変わっていくはずなのですが、男の子は社会に出て働くもので、女の子はそれなりにかわいく、ちゃんと周りの気持ちを気遣えるように育てねというような、育て方がされているように感じています。

自分自身がおしゅうとめさんから言われた言葉で、外孫、内孫は、岩手県に来て初めて聞いて、最初何だろうと思いました。恥ずかしながらこの言葉は私の辞書になかったのです。何でそうやって孫を差別するのか。婿に行った男の子を、「婿にやるために育てたわけではない」と言うお母さんがいたり、「あっちは外孫だから」と言うのです。この人権侵害の言葉を当たり前で温存させて、それを子供たちが聞いて誰が幸せになるのだろう、何の意味があるのだろうと思います。

それから、県土が広過ぎることによって、本当に支援が届いていないと思います。支援の手がこれだけ届かない県土の広域性、本当にそれは行政も大変だろうと思います。

それから、東日本大震災津波によるさまざまな変化で、十数年たって、今ようやく当時言えなかったことが言えるようになったとか、問題が可視化されたり、悪化したりしているという方がいます。東日本大震災津波のときに、夫から本当にひどいDV被害にあつて、こんなときに離婚している場合ではないということで、それからずっと我慢を強いられてきて、ようやく今離婚しますという方もいらっしゃるし、これは実際御本人たちは言いませんが、いまだに痕を残していると思います。

それから、貧困の問題は、私は横浜市と比べて最大原因であると思います。貧困家庭が多過ぎる。特に独り親の女性で稼げる仕事があまりに少ないです。東京都、横浜市であれば、独り親の女性でも稼げて、ベビーシッターを雇って、子育てしているという人もいるのですが、こちらで女性が20万円以上の給与をもらうというのは結構難しい。公務員などでフルタイムで働くのであればともかく、子育てと両立したいと思ったら、15万円がいいところですよ。今の数字は私が来て思った感覚で、本当にあり得ないことです。最低賃金は全国最下位から抜け出すというニュースが先日流れましたが、25年ぐらい前、私が高校生でアルバイトしていた時の時給が850円ないし繁忙期950円でした。岩手県の最低賃金が今度950円ぐらいなので、二十数年前の横浜市の高校生の水準によるようになったことになります。それだけの格差があることについて、中小企業は大変な状況があるのはそのとおりですから、労働審議会の議論に出ていても、中小企業も大変だしと言って、全く話が進まない。やはり行政のほうで何らかの手当てをしていかなければいけないのだろうと思います。

それから、各種組織におけるジェンダーバランスが悪いこと。PTAの役員は全部男性ですが、雑用は実際お母さんたちがやっていますよね。少なくともうちの小学校はそうです。町内会や各種団体の役員は男性の名前が並ぶ。だから、何でそんなに女の人は後ろに下がろうとするのかわからないです。男性もやりたくてやっているのかわからないのですが、そういうものだという空気感が伝統や慣習にあるのではないのでしょうか。

あとは、県や市は、組織の3分の1を女性にしろということを経営者から言われるようになって、大分変わりましたが、それ以外の民間の組織であれば、50代、60代、70代の男性がほとんどという組織が圧倒的多数だと思います。やはりジェンダーバランスが悪いのです。その世代の男性が悪いではなくて、この社会がこれだけ多様にもかかわらず、20代、30代、40代の女性や男性たち、それからそれ以外の人たちという層の声が全然反映されないことが、政策が誤ってしまう原因になっていると思います。

高齢化率が断トツで早いというのは、若者の中でも特に有為な若者が流出しているからだと思います。私も大学生と話をしていて、志ある人ほど外に出ていくんだなとも思っています。

それから、集団主義的な教育が相変わらず行われていることが、一番の根本的な問題だと思います。

官民ともに相談機関、支援機関が足りていないのです。岩手県男女共同参画センターがアイーナにあります、その予算が物すごく低いです。もりおか女性センターより低い。センター長に聞いていただきたいのですが、全国で見ても、圧倒的な低さで、その低さで相談活動を行うのは無理があって、相談員が非正規になったり、きちんと専門的な教育を受けられないということになります。配偶者暴力相談支援センターは、本当に最後のとりでだし、そこが機能しなければ、犯罪がはびこってしまいます。そこには確実に虐待を受けている子供たちがいます。面前DVというのは子供にとっては虐待ですから、その子供たちを救うという機関が全然機能していない。子供SOSのチラシを学校で配っていただいても、子供はそんなところに電話できないわけです。だから、親、特にお母さんに手助けをしてあげる必要があるのですが、そのお母さんが声を上げられる身近な相談機関が他県と比べて圧倒的に不足しています。その相談機関が量、質ともに相談しやすい充実したものとなり、自分たちのところでシェルターを完備する必要があります。アイーナはシェルターすらないし、権限も、お金もないのです。シェルターをきちんと準備し、速やかに行動できる体制を警察頼りではなくやる必要があります。何か事が起きたときに、家庭内の問題で警察に行ける女性なんて、ごくわずかです。夫からぼこぼこにされても警察に行かないのです。それには皆さんの勘違いがあるので、ぜひそういう相談機関、マンパワーを充実させるために、予算をあてがっていただきたいと思います。それは、民間でジェンダーや女性のための組織や、特別養子縁組をあっせんする組織にもお願いしたいです。FPICという面会交流支援団体がありますけれど、そういう団体も圧倒的に不足しているので、DV下において子供が親に安心して会える、場所もないのです。それがこの

岩手県の現状で、いつも相談にのっていて、「ごめんなさい、何もないんですよ」みたいな話をせざるを得ないのが悲しいと思っています。

最後、1 ページの下に書いたのは、行政が把握していない多数の県民の深刻な現状があります。これを何で書いたかという、岩手県社会福祉審議会の委員をしているのですが、出てくる被害のデータは、申告があったものだけにもかかわらず、去年より減っていますみたいな話をされるとがっかりします。それは去年より行政が何もしなかったということではないかと思ってしまうのです。コロナ禍にステイホームで、誰にも相談できずに苦しんだ人たちがたくさんいたわけですから、そういうことを言えないから被害件数が少なかっただけかもしれないのに、被害申告件数は減少していますというデータが出てくると本当にがっかりします。行政機関に出ているのは氷山の一角で、我々が把握していないものが大多数だと思えるべきなのではないかと思います。これがまさに人口減少、若者流出につながっていると思います。なので、もう少子化ですし、積極的なこちらからの介入をしていく必要があるのではないかと思います。

インクルいわてからこの前聞いてびっくりしたのですが、例えば、発達障がいや学習障がいのお子さんがある御家庭は、お母さんも支援が必要な御家庭が多いのですが、学習支援と称して、その御家庭に行って、まずお料理から一緒にやってみたことで、お母さんの御飯が本当においしくなったそうです。毎日ジャンクなものしか食べていなかった子供が、インクルいわての職員が何百キロもかけてお家に通って、肉じゃがを教えてみたいなことをする中で、お子さんがちゃんと食べられるようになって、学習に向かうようになったということもあるようです。一見違うように見えても、そういう形の切り口で支援につながっていくということもあります。

DVを受けている女性たちの中には、精神疾患や、障がいを持っていたり、さまざま困難を抱えている方がいらっしゃいます。その人たちにみずから相談せよなんて無理な話なので、積極的に介入することを民間機関を通じながらやっていただくのがいいのではないかなと思います。

それから、私が切に願うのは、抜本的に教育を変えていただきたいと思います。各県で、すばらしい先進的な取り組みがあり、成績表を廃止している県だってたくさんあります。私が見ていて、先生方の仕事の7割、8割方が雑用で、いまだに学校で現金を集めています。この前面談で大変ですねと言ったら、「いや、そうなんです。あれも冷や冷やして、毎回数えるのも大変だし」と言っていて、そんな雑用を先生たちにさせないで、先生しかできないことをぜひやってもらって、それ以外のことは予算をあてがってきちんと制度化していくとか、幾らでもやり方があるはずなのです。そこをきちんと議論していくことが必要なのではないかと思います。

最後に自由の相互承認と書いたのですが、私が哲学の用語で最も好きな言葉です。憲法がある意味でもあります。私たちはずっと血なまぐさい歴史で、相手を殺す、恨みを買

って殺されるという戦争の歴史を経て、お互いの自由を相互承認していくことでしか生き残れないということを悟り、そして憲法をつくり、そういう教育を行ってきた。だから、教育の目的は自由の相互承認だったのだと言われているのですが、そういう文化をまさに岩手県でつくっていく。他者の人権を侵害しない限りお互い自由に生きられる。それを尊重するまさに土台、土俵をつくっていくのは、県であり、国である。そういう文化をつくっていきたいと思っております。

2 ページの2に行きます。事例紹介で、これは私が今まで取り扱った事件を基にしてありますが、守秘義務の関係があるので、複数の事案を混在させるなど変更をしていますので、取扱いに御注意いただければと思います。

最初に申し上げたいのは、DVもセクハラも同じですが、人権侵害だということです。この人権というところの人権は、皆さん何だとお考えでしょうか。いわゆるハラスメント、DVもそうですし、憲法13条の最も大事な権利なのですが、おわかりになる先生方いらっしゃいますか。

○佐藤ケイ子委員 個人として尊重される。

○渡部容子参考人 そうですね。そのことを憲法上、人格権と呼んでいます。ぜひこの人格権という言葉、ハラスメントの裁判例では必ず裁判官が書きますけれども、選択的夫婦別姓のときも氏の問題で人格権という言葉が使われます。DVもそうですが、ハラスメントというのは全て、相手の人格権を侵害する違法な行為なのです。この人格権というのは、あまり聞き慣れないのですが、実はこの国で最大の価値を持っている権利です。いわゆる基本的人権の根幹です。何かというと、これは本当に生まれたての赤ちゃんから亡くなる時まで、人が人として生きたい、人間として尊重されたい、そういう根源的な欲求に基づくものです。これが最も人には大事なのです。これが侵害されると、人間は自分を殺したり、人を殺したり、いろいろなつらい思いをしていく。心と体が壊れていくのです。この最も大事な人格権を侵害しているのがDV、セクハラになってきます。そういう問題だということを冒頭申し上げさせてください。

ただ、被害を受けても、そのほとんどが何もしません。何もしない理由をそこに書きました。お読みいただければと思うのですが、基本的に被害者というのは、DVの場合は特に夫からのマインドコントロールに遭っています。しかも、毎日暴言を受けているので、自分の被害に自信を持ってないのです。自分が悪いと思わされています。確かに人間というのは細々いろいろできないことがありますよね。妻として、例えば女らしさに反するような、料理が下手、掃除がうまくできない、子育てができない、家の中が散らかっているとか、そういうとき夫に、何でこんなにおまえはできないんだ、このばかやろうと言われ続けていると、そうかなと思う部分が女性にあると思います。毎日毎日続けられていると、女性のほうもマインドコントロールが完了していくのです。おまえは俺がいなくて何もできないやつなんだとか、誰が飯食わせてやっているんだとかという話が続いていくと、女性のほうは自分の被害に自信が持てず、誰かに言おうなんて思いません。自己肯定感が下

がり、無力感、無気力感にさいなまれていきます。精神疾患を発症している方も多く、何もできないのです。誰に相談していいかわからないということが多いと思っています。

あとは、加害者というのはDVをする人、セクハラやパワハラする人なのですが、その人が自分が加害者だと思っている人はほぼいません。私の経験からして、私はセクハラをしました、私はDV夫です、DV妻だと認める人はいないです。仕方なく、弁護士に言われたから慰謝料は払うけれども、納得していません。それぐらい加害者というのは加害の認識がないのです。なぜかというと、加害者はみずからの正義感に基づいて行っています。自分は正しいと思ってやっているのです。自分が言っていること、やっていることは、妻にとって必要なことだ、この家庭にとって必要なことだ、職場だったら、それも意味のあることだ、コミュニケーションとして必要だなどと思って、自己の信念に基づいて行っています。憲法の思想、良心の自由からすると、その方がそういう正義感を持つことは許されると私は思います。ただ、それを対外的に表明し、暴力、脅迫などの手段によって実現しようとしている時点で犯罪になるわけです。だから、加害者というのは加害の自覚がないために、セクハラもDVもなくなることがなく、とまることがない、悪化していく一方なのです。だから、被害者が申告したり、誰かがストップに入る必要があるというのはここのだと思っています。特にDVというのは、相手を、配偶者を支配、コントロールするために用いる手段を合理的に選択しているのです。だから、配偶者をコントロールできないと思ったら、さらなる強いDVの手段を用いることを選択するため悪化していきます。

あと幾つか取り上げさせてください。DV事案の(3)、実際にあった事例なので、後でお読みいただければと思うのですが、40代でお子さん3人、一番上のお子さんが県外に出ていました。夫は妻に対して、君しかないとか、愛しているとかすごい愛情表現をするハネムーン期というのがあって、そこから緊張期という、ちょっと夫がいらいらする時期があるのです。DVというのはサイクルを回るので、暴力期になるときに身体的暴力や精神的暴力を発動する夫だったのです。この夫は、高給取りの公務員です。東日本大震災津波によって仕事が多忙になって、ストレスが妻にどんどん向かっていくようになったのです。妻をかわいがるといえるのか、支配するために、仕事をさせない、外に出させないということを基本的にしていました。しかも、夫名義のクレジットカードしか渡さない。キャッシュを渡さないのです。そうすると、妻がどこで何をしているのかということ夫は全て把握でき、それが少しでも漏れると正座させて、ずっとどなり続け、朝まで説教するということを繰り返しています。それから、性的暴力もあり、妻が性行為を拒否すると、だったら俺は風俗に行くぞと脅したり、無理やりすることもありました。でも、妻のほうは、夫がハネムーン期という愛情表現する時期もあったり、謝ってきたりすることもあるので、これは愛情だと、自分は弱い人間だから私が悪いのだと思って、夫は給与も高いし、子供3人育てなければいけない、その思いから、20年ぐらいずっと我慢しているのです。

ここで起きたのは妻の不貞です。妻は、何とか頑張って夫の許可を得て外にバイトに行

かせてもらえるようになったのです。許可は本当は必要ないのですが、そのバイト先の男性に夫のことを相談したら、まさにつけ込まれがちな女性で、不貞行為に及ぶのです。それを夫が知り、激怒で、修羅場があり、それ以降夫のDVというのは非常に悪化します。顔以外、体中傷だらけという状況です。

その後、女性は身の危険を感じて、お子さんと一緒に逃げて、協議離婚届も出して、家も見つけたのですが、夫から養育費の送金がなく、彼女は自活能力がないために、子供の養育に支障を来すのです。お子さんの受験もある、お兄ちゃんは大学生活を送れないということになって、お子さんが説得したにもかかわらず、お母さんは家に戻ってしまったのです。夫から毎日のように謝罪のメールがあり、君のことを愛しているよ、戻ってきてくれと言われ、それで家に戻る。そこで、子供さんがお母さんについて、お父さんに懐かないということで、お子さんに対しても手を上げるようになり、妻に対しては本当に深刻なあざ、骨が折れるようなけがを負わせて、ようやく警察ではなく、私のところにいらしたのです。それも法テラスの担当日にふらっとお見えになった。私は20年生きてきて、初めてこのことを人に言いましたと言っていました。すぐ病院に行ってもらって、写真も全部撮ってきてもらいましたが、本当に体中のひどいあざでした。どうしたらいいのでしょうかというところから始まって、この方の場合シェルターだとお子さんの学校の関係とかでも困るというので、生活保護を利用しました。夫が幾ら給与があっても、こういう場合には生活保護を利用できます。お子さんとお母さん分の生活費と、あとは引っ越し費用、一時金、最初の家賃とかも全部負担していただけるということで、アパートを借りて、とにかく夫の知られないところで生活ができた。もともとすごく立派な家に住んでいたのですが、数カ月たってから彼女が言っていたのは、「あんなにいい家だったけど、今のこの狭いアパートでも娘2人と静かに平和に暮らせる生活が本当にうれしい。私は本当におかしくなっていた」というような話をされていました。

もめました、双方代理人がついたので、これは離婚調停できちんと決めて、夫からは学費も含めて養育費を払ってもらい、お父さんとしての務めを果たしてもらいということで、それ以後も平和に暮らしております。最初は顔がどんよりして、傷だらけだったのですが、本当に美しくなれました。私は、美しくなる離婚とよく呼んでいるのですが、離婚によってほぼ全て、私が経験した女性たちは美しくなります。美しくというのは、笑顔になるという意味です。本当に穏やかな生活を取り戻すということは、自分らしく生きられるということなのだと思います。

あと、(4)の子だくさんの農家の嫁も岩手県で多いので、紹介したいのですが、農家に嫁いで、夫が日常的にモラハラをするけれども、夫の両親と同居しているから子供をたくさん育てられていて、家からも出づらいという女性で、ただ夫の避妊をしない性行為が本当に頻繁で、次から次へと子供を産まされてしまう。中絶も5回も6回もというような人もいて、過去のケースで10回という方がいました。中絶を10回もさせられるという、もう本当に心も体もぼろぼろだと思うのですが、離婚したいならおまえだけ出ていけ、子供

は渡さないと言われ、ずっと悩んでいたけれど、ようやく離婚調停で、きちんと親権も得て、子供と一緒に暮らせるようになりましたというの也有ります。

(5) は、熟年離婚でこれもすごく多いで。実際の例で、医者、弁護士、学校の先生とか、いわゆる先生と言われる人たちは本当にハラスメントの加害者になりやすいで。そういう人たちが妻に対して、非常にひどいハラスメントを繰り返して、ようやく離婚をして、きちんと財産分与で、夫の財産を半分にしてもらったというケースで。

最後にセクハラ事案をお話しします。これもほぼ全て私が岩手県に来てから経験したケースで。

(1) 病院の中、廊下で不必要な接触をしてくる、夫との性生活について事細かに聞いてくるとか、自分の意見を言うてくる。当直の際に、自分の部屋に呼んで、シャワーを浴びようなどと誘って、女性は頭がおかしくなつて逃亡したというケースで、私が代理人に就いたのがありましたが、同意だと思つていたという反論でした。結局女性のほうも、上司だし、自分のほうが年が若いということもあつて、本気だと思いたくないということとか、明確な拒否はできていなかったので。薄い拒否はしていても、はっきり「やめてください」ということはやはり言えないので。私のケースで言えた方なんていないですけども、そういうこともあつてつけ上がつてくるということでのトラブルで。

(2) は田舎のほうの会社でした。何度もキスを強要して、動画を何とか撮ろうとしたところ激怒されたのですが、会社をやめるわけにもいかないしということで、この方は結局泣き寝入りしました。

(3) これも性的な暴言を繰り返して、精神疾患となつてしまつて、退職に追い込まれた方です。

(4) 若い女性の部下が、出張先で上司と2人きりになったときに、女性としては業務上の必要や上司への配慮から親切に接したことが、自分に対する異性の好意だと勘違いをして、不倫関係に持ち込むケースでした。これが問題になるのは、夫の妻にばれて、妻から慰謝料請求を受ける、ダブルパンチみたいなことを女性は受けて、追い込まれるということもありました。結局こういう場合は、女性だけが退職して、男性のほうはその会社に居続けるというパターンがほとんどで。

(5) 議員同士のセクハラ、これも残念ながら何度か御相談を受けたことがあります。

(6) 職場で盗撮をした上に、鍵を盗んで女性の家に勝手に入ったという方もいました。

最後に、私が岩手県に来て、いろいろな委員をさせていただいていますが、2019年の法律改正でハラスメント対策が義務化された関係で、最近では、会社や大学、幼稚園などの団体からハラスメント委員会の委員を依頼されることが非常にふえています。北上市議会や紫波町議会にも呼んでいただいて、議員の皆さんにハラスメント講座をさせていただきました。議員の間でもハラスメントに関する事案が多く、議会事務局が危機感を持ってやってくださったのですが、その中で経験した事案を少しだけお話しします。

(1) の子供の性被害について、実際はすごく多いのですが、皆さんデータはお持ちでし

ようか。某施設にいる心理士から話を聞いたことですが、そこに入っているお子さんの半数以上が性被害を受けてきたということを言っていました。男の子もだということ。を数カ月前に話を聞きました。ぜひ調査していただきたいと思うのですが、近親者の子供に対する性暴力がすごくあります。子供たちは言えない、お母さんも見て見ぬふりということもありましたので、私は具体的なことまで聞けなかったですが、かなり衝撃を受けました。現場の方なので、事実だと思います。

それから、私は社会福祉審議会の児童福祉専門部会という里親登録の審査をしたり児童相談所であった虐待の審査をする部会にいて、私以外にも専門家の方で、医師や、心理学の方などもいらっしゃいますが、ひどいと思っているのは、里親登録が甘過ぎるのではないかということです。資料もその場で回収されますし、具体的な事例については守秘義務の関係から申し上げられないのですが、基本的に里親の調査や審議のとき、県の方針として全件通すということになっているのです。なので、絶対これだめですよという里親申請の方でも通すのです。私がちょっとこれだけはというので、しつこく言って、ほかの委員の方も同調してくださったのですが、何とか配慮しますので、通していただきたいということで通ったのです。その後にほかの委員の方に聞いたら、過去にも、この方は絶対通すのはだめだという件があったときに、県の方が委員にお願いに回って通したということもあるようです。愛情を持って親から育てられるという意味で里親がふえることは必要なことだと思います。けれど、件数をふやすことを優先するがあまりに里親審査が甘くなってしまうのは、本当にもう取り返しのつかないことになると思います。どういう方々が里親の申請をして登録されているか、ぜひなってほしいという方もたくさんいらっしゃいますが、これはちょっとと思う方々も実際いらっしゃるし、児童相談所での虐待案件も、私は非常に問題だなと思うのも幾つもありました。ただそれをどなたも問題視なさらないし、そういう会議の場でも皆さん、同調圧力なのか、出るくいは打たれるなのか、誰も発言しないのです。ちなみに、社会福祉審議会の会議では、私しか発言しないことがたくさんあります。後で「あなた、いいこと言っていたわね」と声かけてくださる方がいて、だったら言ってくださいと思うのですが、周りの皆さんは、静かにするのが今は適切だと思っていられちゃうのかもしれない。私は空気を読まずに言いたいことを言っています。

それから、岩手県での女性相談の場所が少な過ぎると感じます。

それから、子供の選択肢がなさ過ぎる。今は学校1本ですよ。学校の不登校の問題がふえてようやく岩手県でも問題になりましたが、学校に行くのは義務ではなく権利ですよ。学校が合わなければ、学校でなくてもいいはずなのです。その子供にとって本当に学ぶことは楽しいと思える学びの場所を用意する責任が県や市にはあるはずなのです。にもかかわらず、フリースクールは高いし、そもそも数もないし、学校以外の選択肢はほぼないです。学童に落ちた友達が数人おり、それも問題視したら、盛岡市では約30人の親が学童に落ちたということで、みんな絶望して、泣いていました。その後、児童センターに預けるのですが、時間の制限もあったり、いろいろ問題があります。学童も安いわけではな

く、月1万1千円払いましたが、学童に入れられる親も限られています。保育園の問題は一見解消されたようには見えますが、お子さんが本当に学びたいように学べるという、その多様性には配慮されていないし、あともう一つ、学ぶ環境の乏しさがあり、岩手県というのは大自然はあるのですが、暑過ぎる日や寒過ぎる日、雪が多過ぎる日など外で遊べない時期があり、その時の室内施設が一つもないのです。モールなど赤ちゃんが遊べるところはあるのですが、小学生を連れていくと怒られますよね。だから、高校生のお兄ちゃんがいても、小学生の妹と一緒に、もしくは大人も一緒になって遊べる施設はないのです。山形県などいろいろなところにあるみたいですが、これだけ雪が多く、夏も熱中症ということが言われているのに、室内で伸び伸びと、道路を気にせず、車を気にせず、隣からうるさいと言われることも気にせず遊べる場所が何でないのだろうと思っています。

すみません、時間が足りなくなってしまいました。ありがとうございました。(拍手)

○小西和子委員長 大変貴重なお話を本当にありがとうございました。公開ですので、プレーキをかけながら話をされているのがよくわかりました。

これより質疑、意見交換を行います。ただいまお話しいただきましたことに関し、質疑、意見等がありましたならお願いいたします。

○佐藤ケイ子委員 北上市議会でセクハラの関係の勉強会をされたというのは仲間から聞いておりまして、ぜひあちこちでやってほしいという議員の仲間もふえております。先生はお忙しいと思いますが、活躍する場がもっと出てくるかもしれないと思っております。

このDVとかセクハラとかも、やはり多いというのはそのとおりなのでしょうけれども、その中でも私たちずっと、セクハラに遭っても、拒絶しないほうが悪いのだと、そういう被害に遭ったのも、あなたがそういう隙を見せたからだろうとか、そういったことがあって、なかなか表に出せない雰囲気はあると思っています。相談機能が少ないということを先生がおっしゃっていて、確かに男女共同参画センターでも、相談員はいらっしゃるけれども、非正規雇用だし、それからスキルの面でも、研修会などで事例の研修をしているのかとか、大丈夫かなというも思っているのです。

都会のほうだと、やはり教育者、女性の研究者とか、そういった方々も非常に多くて、男女共同参画にかかわる関係者も非常に多いのだけれども、岩手県はシェルターもないし、本当にそこは不十分だなというも思っているのです。男女共同参画センターや、相談機能を充実させるにはどうしたらいいものかと思っています。予算の問題もあるでしょう。それから、今までの男女共同参画の政策が意識を変えるというほうの政策を進めてきたのですが、私は意識ではなくて、制度とかシステムを変えることが大事なのだろうというも思っているのですけれども、なかなか変わらない。そこは、センターのあり方も含めて、先生のお考えをお聞きできればと思います。

○渡部容子参考人 まず、本当に予算と権限を与えていただきたいと思います。私もアイーナでの相談の担当日が時々ありまして、うちの事務所でお受けしているのですけれども、それは本当にいつも感じます。やはり予算と権限がないと何もできないので、そこをまず拡充

していただきたいです。何でこんなに低予算で放置されているのか、私は理解できなくて、どこに原因があるのか、どこに言えば変わるのかと以前、吉田敬子県議に言ったことがあります、「知事に言えばいいんですか」と言うと、「知事は知らないと思います」みたいな感じでした。だからどうしたら変わるのか私はやり方がわからないのですけれども、ぜひそういうところにもっとしていただきたいです。田舎のほうで民生委員みたいな方だと近所の方であることが多いので、相談できないのです。だから、わざわざ県南、県北地域から盛岡市にお見えになる方もいるぐらいです。ばれると大変だから、夫が市役所に知り合いがいるからとか、そういうことで本当にこそっといらっしゃる方もいるぐらい、自分が悪いとか、自分たちが恥ずかしいと皆さん思い込んでいるので相談できないのです。

制度をつくることだと思います。岩手県こそ先進的な取り組みをもっともっていただきたい。本当はトップが宣言することで変わるのです。企業や自治体でも、例えば首長が、職員からセクハラとパワハラをなくす市役所をつくりますとか、会社なら代表取締役が宣言をすることで意識は変わってきます。先ほどおっしゃっていただいたハラスメント研修、私がなぜ力を入れているかという、本当にハラスメント研修によって変わると思っているのです。変わるというのは、この国の問題そのものが変わるというか、その地域で起きているいろいろな生きづらさとか、見過ごされてきた問題がハラスメント研修をきっかけに変わっていく、すばらしい契機になると思って力を入れているのです。単なる嫌がらせではないのです。人を人として思わない、相手の人間を尊重しない、まさに自由の相互承認に反しています。そういう人権侵害が根幹にあるので、その意識が変わっていけば、恐らく子供も高齢者も皆さんにとって過ごしやすい社会になっていくはずです。制度づくりはもちろん、意識の面でも研修や啓発、教育にもう少しかじを切ることが重要だと思います。

どこの研修会に行ってもそうなのですが、聞きたくない話が出てきたという顔をされる方が多いです。企業研修では嫌な女弁護士が出てきたみたいな顔をされるので見ていてアウェー感がわかるのです。でも、そういう人たちに、あなたのためになる話と最後持ち帰ってもらうのが私の任務だと思っていて、加害者になるというのは、本当にその人の人生をめちゃくちゃにしてしまうのです。加害者には加害の自覚がないとさっき言いましたけれども、自分が知らないうちに加害者になっていることがあるのです。そうすると、加害者はその後犯罪者みたいな形で調査されたり、訴追されたり、場合によっては裁判になって、裁判で勝ったとしても、ほぼ負けなのです。その間の失うものの大きさ、お父さんがセクハラで訴えられているのを娘が知って大げんかになって、家では口をきいてもらえず家庭崩壊になって、加害者の方が自分も精神疾患になったとハラスメント調査のときにおっしゃっていました。加害者とされることのリスクも大きいので、被害者にも加害者にもならないようなコミュニケーションのやり方さえ学べば、そんなに難しいことではないのです。これは、家庭内でも同じことなのです。

だから、そこについてもう少し方法論、コミュニケーションができないかとおっしゃる

方もいるのですけれども、むしろ双方向のコミュニケーションをうまく取っていけば、ハラスメントの問題は起き得ないはずなのです。他人に言いたいことだけを一方的に言うのではなく、基本的に相手の立場を考えながら私たちはコミュニケーションを取りますよね。それが夫婦だったり、上司部下だったりすると、一気に外れて、自分の言いたいこととか、自分のやりたい放題やってしまう、そこに問題があると思います。そして、相手を傷つけて、家庭が崩壊すれば、お互い傷つく。だから、そういうことの方法論を学ぶ機会が、本来であればもう少し早い段階、高校や中学とかの段階からあってもいいと思います。県でいうと知事の立場から、うちの県からなくしますと表明してほしいです。

特にパワハラと違って、セクハラはゼロにできるのです。パワハラは厳しい叱責というのはあり得るので、グレーゾーンがあります。要するに労働者が間違っただけをしたときに指導することは適切なことです。むしろ、しなければいけないことなのです。そのやり方を間違えてパワハラになる。なので、パワハラというのは一生グレーゾーンがつきもので、ケース・バイ・ケースです。ただ、セクハラやDVは業務上の必要性が1ミリもないので根絶できるのです。だから、セクハラとDVはなくしましょうと言え、先ほどおっしゃったように、被害者が、私が悪かったのではないかと思わずに済む。これは悪いことなのだ、加害者がおかしいのだと。物を盗んだ人が悪いのと一緒に、やった人が悪いのだと、私は被害者なのだと言いきりせずに進んでいけるのかなと思います。

自責の念から自死される方もたくさんいます。本当に恐ろしいことです。セクハラやパワハラを受けて自死された方の遺書を見ると、ごめんなさいと書いてあるのです。こんな至らない私でお父さん、お母さんごめんなさい、会社の皆さん迷惑かけてごめんなさいと。だから、自責の念というのも、本当に人を苦しめるものだと思うので、そういう雰囲気をなくしていきたいです。

○佐藤ケイ子委員 予算と権限を拡充するために、私どもも頑張っていきます。

○はぎの幸弘委員 少し細かい話をするようで申し訳ないのですが、先ほど里親登録の問題ということで、甘過ぎるのではないかという話がありました。その雰囲気が私には経験がないのでわからないのですが、要は里親として設定するに当たって、その方の経歴を見て、こういう方ではちょっとまずいのではないかというようなことが、通ってしまうという意味なのですか。

○渡部容子参考人 私の目から見るとそういうことです。

○はぎの幸弘委員 だとすると、非常に私も問題があると思うのですが、何でそんなことが通るのだと思いますか。差し支えない程度で、もしお答えできるなら、どんなことが履歴書などに書かれているのでしょうか。例えば前科があるとか、そういう例を教えていただけますでしょうか。

○渡部容子参考人 載っていることは、里親登録する方の現在の御病気、御家族の御病気、例えばおじいちゃん、おばあちゃんと暮らしていらっしゃる場合は、おばあちゃんが認知症でいらっしゃるのか。あと御職業、年収、負債、おうちの中の間取りとか、お子さんを

お迎えするので、どういう家なのか、どこにあって、小学校がどこなのか、あとは信仰宗教とか、なぜ里親登録をしたいのか、どうしてお子さんを迎えたいのか、男の子希望とかという方もいらっしゃる。そうしたら、なぜなのか。そういう情報が、児童相談所のほうで調査して上がってきたものを我々は見るのです。もちろん当該の方がお見えになるわけではなく、我々は資料を見て、こういう方が適格性があるかどうかということで見ると。

○はぎの幸弘委員 何となくわかります。ありがとうございます。

きょうはDV、セクハラがテーマですけれども、当委員会は人口減少も扱う、範疇ですから、里親登録というのは非常にそういった部分ともリンクすることだと思いますし、みんなが幸せになるのであれば、そういう里親としてうまくマッチするのであればいいと思いますが、内容的に甘過ぎるという問題に対して、先生として、例えばマニュアルをつくったほうがいいとか、今後どうすればそういった甘過ぎる事例が改善されるというのはありますでしょうか。同調主義をなくすだけだと多分なかなかファジー過ぎて、伝わらないと思うのです。その辺どう考えていますか。

○渡部容子参考人 私は正直、県の担当者と懇談したいと思っていました。この件についてどう思っているのだろうと。

児童相談所とは関係なく、いつも県の担当課の方がお見えになっているのですが、その方々はどう考えているのか。いつも私がぐちゃぐちゃ文句を言うと、ではこういう条件を付して通しましょうかみたいな形で、こういうところには慎重を期してやっていくなど条件を付して最後通す形で、妥協案を提示してきます。あとはもう現場の判断になってくるので、実際に登録されるかどうか、その先は我々はわかりませんが、実際運用としてそういう方に里子さんをあてがわないようにしているのかとか、そのあたりのところも聞きたいと思っていたのです。実際は拒否しづらいのかなと思っています。

○はぎの幸弘委員 通すことありきで考えていらっしゃるのかもしれないですね。そこはわかりませんが、そういったところにちょっとミスマッチの問題が出てくる可能性もありますから、今後のテーマになると感じました。

あと、旧態依然の会社は割愛されましたが、私も会社経営していて、気になるのですが、差し支えない程度で、ここの問題点というのをお話していただけないでしょうか。

○渡部容子参考人 やはりいろいろ法改正もあり、今労働局ですら、パワハラやセクハラによる労災申請を3割くらい通している方向なのです。パワハラによる労災申請というのはなぎ登りで、5年連続増加し続けているのですけれども、それも結構通してくださっているのです。そういうふうにはラスメント防止の法律もできたのに、時がとまっている会社が多くて、スタッフに対して我法なりという代表者が結構多いわけです。だから、自分が言ったことは全て正しいし、自分の思いどおりにさせる。だから、労働基準法違反とか、そういうことが当たり前に行われているのです。

○はぎの幸弘委員 要するに経営のトップの問題ということですね。

○渡部容子参考人 経営者ないし経営者の下にいる実質的な権限者の方だったりすることもあります。そういうことが全体の雰囲気、ハラスメント体質の会社を生んでいたり、労働基準法違反が当たり前という、旧態依然のブラック企業的なものがずっと年々受け継がれていて、これが我が社の伝統ですみたいな感じになって、そうすると入った若者は逃げていってしまうということはあると思っております。労働基準法違反がすごく多いかなと思っております。

○はぎの幸弘委員 前の回のときも話しましたが、うちの会社はアパレル会社ですから、8割方女性社員なので、常に月1回の社長朝礼のときは相手の気持ちも考えながらやり取りしなさいよと言っていますが、それでいいということで理解してよろしいでしょうか。

○渡部容子参考人 もちろんです。

○千葉伝委員 相談窓口の件で、なかなか少ないという話なのですが、私は運転しながら人生相談とかを聞くのが好きなのですが、世の中にはいろいろな悩みを抱えている人がたくさんいると感じます。そういった人たちは、どこの誰に相談すればいいのかわからないという人がよく人生相談するということで、全て解決はできないかもしれないけれども、相談しただけで、すごく安心感が出てくるのも前提にあると思います。お聞きしたいのは、全国、岩手県の中で、相談に乗ってくれる人権の相談員といたしますか、民生児童委員や、人権擁護委員など、そういった人たちが地域に結構な数の方がいると思うのですが、そういった人たちにいろいろな相談があるとは思っているのですが、相談窓口として、制度そのものがきちんと活用されているのでしょうか。

○渡部容子参考人 私の過去の経験から、今の二つの方に御相談をしたといった人はいませんでした。やはり、先ほども言いましたけれども、身近だと相談しづらいというのと、敷居が高いのかもしれない。言葉を選ばずに言うと、結構高齢の方が多いです。そうすると、特に若い世代や40代でもお声がけしづらい。あと多くの方が御自身の被害を矮小化する傾向にあるので、私なんかの相談をそんな方にみたいなことで言づらいことも多いのではないかなと思います。もっと言っていただければと思います。

○千葉伝委員 そうすると、制度のこと法律的な問題もあり、それから子供の権利を守る、そういったことをしっかりと進めていくには、委員になっている人たち自身も勉強なり研修をしていただく。先生がおっしゃるように、地域では私の知っている人が民生委員を何人かやっていますし、昔は私の父も30年か40年民生委員をやっていて、一つは法律違反で、牢に入って、帰ってきた人たちに対する相談もしていました。それは法律で決められた部分でしょうから、必ず相談しなければならない、報告しなければならないということがあるのでしょうか、それはそれとして、地域でいろいろなことをやっている人がそういう役目をしているということで、自分の相談をそういう人に話していいのかというので、ちゅうちょするというのが出てくるのだろーと思います。ではこれからどうすれば、そういった制度を有効に活用していけるのか、もし先生の考えがあったらお願いします。

○渡部容子参考人 私もそうなのですが、相談というのは来てくださいますと来ない

のです。例えばなのですけれども、産後の離婚がすごく多いのですが、産後というのはホルモンバランスが乱れ、女性がいらいらし、それが夫に向かったりということもあるし、夫が女性の変化についていけなかったりすることが原因でもあります。今、核家族でワンオペ育児だったりするので、すごく追い詰められて、産後1年以内の離婚の御相談というのはすごく多いのです。これは、私は本当に不幸だと思っていて、赤ちゃんはもうほとんどお父さんと接点もないまま、そのときの夫婦間のもつれで離婚してしまうことになります。今の若い方はよくも悪くも一度決めたらそれに突き進みますから、離婚してしまうのですけれども、産後の大変な御家庭の中に入って支援する制度はほぼなくて、保健師の赤ちゃん訪問ぐらいしかないので。私自身もそうでしたが、親は遠くにいて、核家族で、誰の援助もないのです。本当に産後ドゥーラもないし、家政婦の制度も岩手県はないので、3人目を生む時は自分でつくって、家政婦募集と紙で配ったぐらいなのです。それぐらいどうやっていけばいいのだろうと追い詰められました。でも、どこに相談していいかもわからないし、頼れる地域の人もない。そういうときに、産前産後ヘルパーみたいな感じで家に来てくれる人がいて、その中から子育ての悩みとか、もしくは虐待につながるような発見ができたとか、夫からDVを受けているかなどがやはり出てくると思うのです。

高齢者のおうちに訪問する方がいれば、そういう方の中から高齢者虐待だったり、家族間の問題がある御家庭に入って、支援する中で、話がようやく出てくるということがあるのではないかと思います。

最初に、インクルいわての例を申し上げましたが、その方に必要な援助という形で、もうちょっと切り込んでいく中で、問題があれば支援機関につなげていく制度というか、体制づくりが必要だと思います。今、産後ヘルパーみたいなものが産婦人科で少し始まったと思いますが、多分産後ケアをして終わりだと思うのです。でも、そこでもっと御家庭の問題とか、親の問題とか、お子さんの虐待につながるようなことがないかということまで切り込めたら、全然変わってくると思います。赤ちゃん訪問などは、ほとんど意味がないです。3回受けましたけれど、体重測って、太り過ぎだとか、痩せ過ぎだとか言って、傷ついて終わるという、来ないでくれたほうがよかったのではないかとやっているお母さんもいました。すごく細かく体重だけ測って、ちょっと痩せ過ぎですねとか言われて、すごく落ち込んで、今のお母さんたちは真面目ですから、ネットで検索して、どうやったら体重がふえるか、ミルクをあげなければいけないとか言って、おっぱいもあげて、ミルクもやったら、消毒もしなければいけない、もっと大変になってどんどん追い詰められていくのです。赤ちゃん訪問も大事だと思うのですけれども、もっとその中身も充実させてほしいし、そういう中で見えてくること、本当は、人は悩みを話したいはずなのです。先ほどおっしゃったように、人生相談もそうですが傾聴していただくということは人間すごく大事です。人に話を聞いてもらって解決する人だっているぐらいです。答えは見えていることもあるのです。

だから、話をさせてあげる機会を設けてあげるというのは、そうやって行政がお金を出してやっていくシステムももっとふえたらいいのにと思います。そうでないと、今の人たちは怖くて、どこにも出てきてくれません。幾ら何とか教室とかとやっても、意識の高いお母さんしか来ないですし、そういう人は大体問題がなかったりするのです。貧困や独り親、若くして子供を産んだりだとか、そういう人たちが出てこないです。ゼロ歳児向けの教室を盛岡市でやっているのですが、高齢出産女性が多いので、びっくりするぐらい年齢層が高くて、そういう人は子育てに対する意識が高いです。だから、20代の若いお母さんなんて、来ないです。そうやってちゃんと育児の情報を自分でつかみに行く人とそうではない人といるので、やはりこちらにきちんとスポットを当てると、本当にかわいそうな子供の虐待とか、産んで死なせてしまったという事件も防げると思っています。私はお母さんの援助というのは本当に大事だと思っています。

○千葉伝委員 里親の話が出ました。私は、獣医師なのですが、東日本大震災津波のとき、飼っていた人がいなくなった犬とか猫があちこちにいて、それを沿岸地域の獣医師が預かったのですが、ではそれをどうするかということで、譲渡して、飼いたい人を募集したりしました。ただ、これは動物の話なので、人間の里親と一緒にするわけにはいかないのですが、里親になりたい人というのは、極端に言えば、例えば子供さんがいなかったり、なかなかできなかったり、いろいろなことがあって、切実な思いで里親になりたいという人たちだろうなと私は思うのですが、そういった人たちを決めるのが、先ほど言ったとおり、私からすればいいかげんなやり方で決められるということ、後が大変だろうと思います。先生がおっしゃるように、県のほうが何とか通してくれれば、世の中どんどん悪いほうに向かうのだらうなと思いますので、議会の中でもそういったあたりはきちっと確認したり、進めるということはやらなければならないと思います。

もう一つ、議員というのは、専門というのを皆さん持っているかもしれませんが。私は、よろず相談屋と言っているのですが、何でもとにかく相談を受けるということで、離婚相談に来る人がいるのです。ただ、地元だと、どっちも知っている人だから、私はそれは介入しません。弁護士に相談するよう言うと、弁護士に頼むと金がかかるでしょうと言われる。今は30分5千円で相談を受けられるということをみんな知らないわけです。そういった人に知っている弁護士を紹介して、そうするとその30分で大体の物事が解決できます。いろいろな相談事を受けるということからすれば、我々議員も、さっき言ったいろいろな人たちからいろいろな相談を受けてそれを采配というかが議員の仕事だろうなと思っています。

きょうのDVやセクハラとかというのは、何かあったら先生に相談することもあるかもしれませんが、頑張りたいと思います。

○渡部容子参考人 私は、里親自体はふえたほうが良いと思っています。登録してくださる方、適格を持っている方、たくさんいらっしゃると思います。既にお子さんを育て上げたとか、そういう方々にとってハードルの高い制度になっているのか、周知されてい

ないのか、そこら辺はわかりませんが、もっと母体はふやしていいと思っています。
ただ、その前提で審査はきちんとということで申し上げました。

○小西和子委員長 ほかにありませんか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○小西和子委員長 ほかにないようですので、本日の調査はこれをもって終了いたします。

本日は、本当にありがとうございました。私は、渡部弁護士が講師の盛岡市の憲法講演会をお聞きしたのです。岩手県内各地でああいう講演をしていただきたい、そう思い今回もお願いいたしました。我慢強い、真面目、恥の文化、いいところだと思われるところもあるのだけれども、それが生きづらさにつながっているといったことも、さまざまな相談の例からお話していただきました。

それから、やはり相談窓口が少ないということですし、県の男女共同参画センターのあの造りというのも問題なのです。相談しても、それが周りに筒抜けになるような、そういう造りで、ほかの県を視察しましたが、そういうところは一県もありませんでした。やはり安心して相談できるような、施設に変えなければいけないのではないかとということと、インクルいわての相談のやり方というのは、岩手型といって、全国的にも高く評価されております。それをぜひ、さらに活躍していただけるためのそういう体制を整えるということも、今、渡部弁護士のお話から感じ取ったところでございます。

すごく衝撃的なことが多かったのですが、これが実情なのだとことをしっかりと受けとめ、県議会でも議論して、生きやすい岩手県、働きやすい岩手県、それは女性、若者、全ての人がそうある岩手県に変えるために、議員として頑張っていかなければならないと思った次第でございます。

本当に本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。（拍手）

○小西和子委員長 委員の皆様には、次回の委員会運営等について御相談がありますので、しばしお残り願います。

○渡部容子参考人 ありがとうございました。失礼します。（拍手）

○小西和子委員長 次に、来年1月に予定されております当委員会の調査事項についてありますが、御意見等がありますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○小西和子委員長 特に御意見等がなければ、当職に御一任願いたいと思います。これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○小西和子委員長 異議なしと認め、さよう決定いたしました。

次に、来年1月に予定されております当委員会の県外調査についてであります。お手元に配付しております委員会調査計画（案）のとおり実施することとし、調査の詳細については当職に御一任願いたいと思いますが、これに御異議ありませんか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○小西和子委員長 御異議なしと認め、さよう決定いたしました。

なお、調査計画に変更があった場合には、追って通知いたしますので、御了承願います。

以上をもって本日の日程は全部終了いたしました。本日はこれをもって散会いたします。
お疲れさまでございました。